

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23560733

研究課題名(和文)多民族社会マレーシアにおける混住状況の変容と動向

研究課題名(英文)Transformation of Mixed-ethnic Settlements in Multi-ethnic Malaysia

研究代表者

宇高 雄志 (UTAKA, YUSHI)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：80294544

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：近年、マレーシアの社会は著しい経済成長と開発を受け、多民族で構成される居住地にも影響を与えている。一連の研究では1990年代から8箇所の居住地(市街地、農村、住宅団地など)において現地調査を行ってきた。ことなる環境下における民族混住の状況と生活空間をとらえようとした。本研究ではこれらを再訪問し1990年代と2010年代の変化を比較して同国の生活空間の動向をとらえた。研究では民族混住の状況の変化を指摘した。それらは居住パターン、混住周辺領域の空間利用、住空間に現れていた。ここでは家賃などの経済的側面だけではなく居住者間の文化的な親和性が影響し、この状況は常に変化の過程にあることが指摘できた。

研究成果の概要(英文)：During recent decades, Malaysia has experienced dramatic economic development, which is reflected in the multiethnic settlements. Author has been conducting field research in 8 selected settlements since 1990s, mainly in west coast of peninsular Malaysia, including historic urban settlements, villages, and housing estates. These field researches provide cross sections of Malaysian social diversity and ethnic harmony. Author intends to conduct re-visiting additional field research to same research field which will provide a perspective of transformation of Malaysian multiethnic settlements. This study revealed notable changes in multiethnic settlement patterns, spatial usage on marginal areas, and physical appearance of housing. In particular, these built environmental changes are occurred by ethnic group familiarity rather than rental cost considerations. This study leads to the conclusion that these multiethnic settlements are dynamic rather than stable in nature.

研究分野：建築学

キーワード：マレーシア 多民族混住 建築 生活空間

1. 研究開始当初の背景

本研究は、マレーシアを対象に多民族社会における民族混住に注目し、安定的に多民族社会を受けとめることが可能な地域や建築空間の姿を模索することにある。

対象地域に住まう人々がどのように都市や建築をとらえ、多様な文化的背景をもつ人々と共存しているのか。またグローバル化のただ中で人々の多元性は次の世代にどう伝えられるのかを展望したい。

2. 研究の目的

これまでの研究では、マレーシアにおける多民族混住を「国土や地域」や「集落や住居」などの異なる空間スケールで把握してきた。

ここでは建築や都市空間にみる物的な環境にあわせて、民族融和や住宅政策、信仰体系や経済関係などの社会的背景を分析した。1990年代前半に8地点で実施している。

本研究では、これに「時間経過」を加えおよそ20年の経過した再訪問調査を2010年代に実施した。これを通じて日々変化する多民族社会と民族混住の動向をとらえる。

3. 研究の方法

まず社会開発を1990～2010年代の間を中心に各種統計や主要言説を通じて整理した。ここでは、独立以降の国土開発政策の展開とともに、同国の政治体制、民族政策についての展開を示した。また人口動態、産業動向、GNP、世帯平均収入、貧困率、生活の質など各種指標を通じてこの20年間の社会変容を捉えた。

このあと以下の8地点の生活空間を対象に再訪問調査を実施した。主にマレー半島部の主に西海岸を対象にしている。調査対象地と州は以下の通り。

- ① 民族混住村 RB村 (ジョホール)
- ② 単一民族村 SK村 (ペナン)
- ③ ジョージタウン市街地 (ペナン)
- ④ マラッカ市街地 (マラッカ)
- ⑤ 港湾集落 (ペナン)
- ⑥ 高原避暑地 (ペナンなど)
- ⑦ 住宅団地 SS団地 (ジョホール)
- ⑧ 衛星都市 (首都圏)

分析では8か所の調査対象を、①②を「村落」、③④を「都心」、⑤⑥を「周縁」、⑦⑧を「郊外」の枠組みでとらえた。

各調査対象地での現地調査では過年度調査(1990年代調査)で実施した調査項目と共通した項目を採用し、これに、各調査対象地の変化をとらえるのに必要な項目を加えて実施した。

主な調査項目は以下の通り。広域的把握：居住地形成、人口変動、民族構成、近隣空間；集落構造、住宅分布、住宅階層、民族属性、住宅空間：平面構成、住宅構法、増改築履歴、

起居形式、生活者把握：就業属性、世帯構成
なお本研究の考察では、同国の民族集団をマレー系、中国系、インド系の主要三民族にくわえて、その他の民族集団の枠組みで多民族混住の様相を論じている。

それぞれの民族集団は、更におおくの小集団で構成されている。また信仰宗教や社会階層などを考慮すればさらに多様だ。

ただし同国の政治や社会開発ではこの主要三民族の関係を軸に論じられることが多い。加えて統計資料などでもこの枠組みを根拠にすることが多く既往研究の層も厚い。そのため、本書ではさらなる多様性や少数者の存在を意識しつつもこの主要三民族の民族関係を分析の対象とした。

4. 研究成果

I マレーシアの社会開発の動向

人口は一貫して増加している。民族間、地方・都市間、州間の所得格差などは是正されていた。独立以降、一貫して経済開発を推し進め国民生活の向上が目指された。これが国民統合を促すものととらえられた。また経済的に劣位にあったマレー系への優先策を講じた。文化政策ではマレー文化を国民文化として重視する立場をとった。

経済成長とマレー優先政策は民族間の格差の是正に作用した。人口増加はマレー系において大きく、中国系では微減を示す州もある。このことは同国における民族関係を変化させる可能性がある。また近隣諸国からの労働者も増加の傾向にある。

同国の政権は独立以降6人の首相により担われた。また民族集団を軸に与党連合を構成する与党系政党と野党をそれぞれに形成した。この中でマレー系の与党系政党が最大勢力となっている。独立以降は、このマレー系の与党系政党のより強い牽引で開発が進んだ。その後、民間活力の導入なども導入されてきたが一貫してマレー系を支持地盤に求心力を維持してきた。

しかし2000年代前半ごろから国民の政治意識が変わりつつある。経済開発も一定の成果を収めたなか国民の期待も多様化している。都市中間層が増加し、既存メディアを通じた世論形成からインターネット等を通じた意見表出が日常化している。これは近年の総選挙における与党連合の議席減や地方選における与野党の逆転としても現れた。

これらの政治的転換は調査対象地における民族間関係や生活空間の有様にも影響をおよぼしていた。

II 多民族混住と生活空間の変容

8か所の生活空間にみる1990～2010年代の変化を通じて、この間約20年に起きた多民族混住の変容を通じて描き出した。

II-1「村落」では2つの村を通じてその社会にみる民族関係と村落開発、多民族混住の変容をとらえた。

同国の農村はマレー系の人口の優勢であることもあって政治的にも積極的な開発政策がとられた。近年では地方農村部に中小工業の振興をすすめる、観光産業の育成も進む。

これにより農村居住者の所得水準の向上は進んだが、営農を基盤とした就労形態が多様化している。あわせて農村社会を支持地盤としてきた政権与党などの保守系政治体制の揺らぎもみられる。

II-1-① 民族混住村 RB 村 (ジョホール)

現地調査は 1994 年と 2012 年 (当研究課題による調査) に実施している。

RB 村のあるジョホール州西部の海浜地帯は、土壌や浸水被害で稲作や野菜の作付けに適さない土地だった。英国の植民地時代から灌漑や農地整備がすすめられ油椰子プランテーションが開発された。

就業構造上もマレー系は公務や農漁業、中国系は流通や小売業、インド系はプランテーション労働と民族集団に分かれていた。

独立以降は一貫した政権与党支持をとり過去 20 年間に学校施設や診療所などが整備され道路整備もすすんだ。観光事業所や小規模工場の進出などで村落における産業構造が変化している。新たな就業先が加わり、大都市圏への出稼ぎも増えた。

これは村落社会にも影響しはじめている。村落組織の代表者は、民族集団を超えて共有されている価値観や尊敬関係がゆるぐことを危惧している。開発機会をもたらした与党への支持体制に影響すると危惧している。

RB 村は村落全体でみれば民族混住がみられる。一方、村落内には緩やかに同一民族が集住する近隣空間が形成されていた。

RB 村は周辺地区への工場立地や大規模建設工事により人口が増加した。転入者は同一の民族集団の近隣に血縁者や知己を頼って転入している。ここでは住戸と人口密度を高めつつも、同一の民族による近隣空間を維持していた。

村の住居には明確な民族ごとの固有性がある。マレー系は高床の、中国系は平土間の住居形式だ。平面構成も起居形式も異なっていた。20 年を経ても住居形式は維持されていた。しかし、近年の建物の増改築では民族に関係なく平土間化する傾向にあった。また中国系の住宅には大きな変動はないが、新築される住宅では、団地住宅と同様の意匠の平土間型のブロック造住宅が増加している。住宅の生産も変化していた。

II-1-② 単一民族村 SK 村 (ペナン)

現地調査は 1996 年と 2013 年 (当研究課題による調査) に実施している。

マレー系の単一民族で構成される SK 村をみた。村は同国屈指の工場地帯に近接しながらも、相互扶助活動を通じて村落美化活動を展開した。美しい生活空間や伝統的な村落社会は広く知られている。

SK 村は中国系人口が優勢なペナン州にあってマレー系のみで占められる。中国系が優

勢な州政と村民が支持するマレー系政権与党の状況下にあっても、村長らの采配で中庸的な政治的な姿勢をとってきた。モデル農村として各種の開発機会に恵まれてきた。

その中で Gotong Royong (相互扶助) を主軸とした村落社会の運営が行われてきた。稲作田を中心とした村落景観は村落の象徴的空間として Gotong Royong で維持されてきた。しかし所得上昇と就業機会の多様化で村民の関心は揺らぎ始めている。

1996 年時点で異民族の村民はおらず 2013 年でも変化はない。過去、中国系事業所の入村があったが移転費を村で負担している。

SK 村にも開発の波が押し寄せている。村民は従前より多くが製造業に従事している。村内に農業を収入の糧としているものは限られる。

過去 20 年間で村民は次々と住宅を建て替えた。ペナンの固有の平面形態を持つ高床の木造住宅が、次々に平土間型のブロック造住宅に建て替えられている。

村の周辺地域では幹線道路の整備などにより近年大規模開発がすすむ。社会環境の変化の中、村の有様も転換しつつある。

II-2 「都心」では 2 都市を通じて、市街地の民族混住の動態と、歴史的市街地の保全と観光開発をとらえた。

両都市はマレー半島における植民地支配の最初期から拓かれた。植民地支配下には、多くの移民が流入したがこれを受け止めたのがこれらの海港の植民都市である。

1990 年代はその歴史的景観を保ちつつも老朽化が深刻化した。1990 年代にはすでに社会の郊外化が進行し、また家賃統制令の施行により都心域は空洞化してきた。しかしその後、世界遺産登録などを契機とし市街地は観光資源として注目されている。

一方、都市の中には一定の民族が集住する界限空間をみた。中国系の優勢な都市社会にみる空間の変化と、高密度な居住条件下における民族混住状況は流動的でもあった。

II-2-③ ジョージタウン市街地 (ペナン)

現地調査は 1995 年と 2011 年 (当研究課題による調査) に実施している。

ペナンは英東インド会社の植民地として拓かれる。海港都市として発展してきた。同国には 2000 年まで家賃統制令が施行されていた。これにより戦前に竣工した多くの建物が残存していた。しかし家賃統制令による低家賃は建物所有者の不動産経営意欲をそぎ、このことから多くの建物は老朽化していた。また社会の郊外化も作用して都心は人口減少の傾向にあった。

店舗併設住宅のショップハウスは市街地の圧倒的多数を占める建築型だ。都心人口の圧倒的多数を中国系が占めながらも、多様な民族集団が使用している。市街地には同一の業種が集積する地区があり、また民族が集住する界限空間が形成されている。

たとえば「リトルインディア」にはインド

系の業者が軒をつらねている。2012年にはその範囲を拡大していた。この拡大は周辺中国系の地区におよぶ。この拡大は様におきているわけではない。空き家などの低利用地がその拡大を受け止めている。低利用地の生じる背景に関連業種の転出、失火や建物放棄による環境悪化、家賃統制令撤廃後の賃貸料上昇、保存事業による長期間の建物の使用不可が要因だ。一方、中国系の同祖廟が軒を連ねる街区には見られない。周辺は依然として中国系が優勢で変化が少ない。

営業者は物件の家賃などを考慮しつつも、同一民族集団が集中する近隣を愛好する。近隣の文化的な親和性が重視されている。

一方、家賃統制令撤廃により一定期間の経過措置を経て家賃は市場水準に上昇した。経営が家賃上昇に耐えられない業者や低所得者層の転出がめだつ。これに対して営業者も一戸の店舗を複数で分割賃借している。

1995年以降に現れた新規業態の新店舗は、民族の混住領域に多く見られた。これらの新規業態は同業者と集中立地し界限を形成するような傾向を示さない。近隣の関連業者とは営業上の結びつきも希薄だ。

対象地域は2008年に世界遺産に登録された。観光客増加への期待から不動産需要が高まっている。建造物を含めた保全事業や街路美装化もあり急激な家賃上昇が起きている。

これにより、既存業者はすくなく撤退を余儀なくされ、業種の入替わりがみられる。建物の保存や街路の美装化事業の施工から間もないこともあるが、保存対象となった地区を中心に空物件が目立つ。

II-2-④ マラッカ市街地（マラッカ）

現地調査は1995年と2013年（当研究課題による調査）に実施している。

マラッカは、14世紀末のマラッカ王国の成立以降、ポルトガル、オランダ、英国と、次々と支配を受けた。その過程で交易の要衝として多くの民族が往来した。

独立後もマラッカは目立った基幹産業を持たず、また港湾都市としての機能はすでに衰退していた。ゆえに観光産業には1980年代から期待されていた。入込観光客数は持続して増加し続けており1980年56万人が2000年152万人となっている。

筆者は1995、2000、2008、2013年にそれぞれに建物占有者の民族属性や業種などを把握しその間の変化を分析している。

この間の変化では多くが居宅としての利用から観光客を対象としたものに転換していた。2008年の世界遺産登録以降はその傾向に拍車がかかるが、1990年代前半でもすでにおきていた。観光客増は、地域社会に営業益をもたらしつつも、物価上昇や不動産価格の高騰など市民生活に影響を及ぼしている。

2000年代後半に施工された河川の美化や都市基盤の整備では一定の成果を上げたといえる。2005年には連邦の国家遺産法が施行され、マラッカ市などによる保存計画の施行

など市街地の建物は保存物件として扱われている。

しかし観光産業の伸張は市街地の既存の生業や生活文化の実質を変容させた。文化的多元性が重要な資源となってきたが、観光地としての商品化は逆に均質化をもたらした。表層的な文化の保全とその商品化に陥っている。「ステージカルチャー」化や「プラスチックストリート化（露地で廉価な土産物ばかりが売られている様子）」についての批判も高まっている。少数の民族集団、また広い社会階層をも視野に置いた歴史的背景を捉えなおすことも必要だ。

また建物用途の転用の規制が求められている。2010年以降は市政府により古物取り扱いや宿泊施設、飲食施設の業務許可を運用して質的量的な規制策の検討がはじまっている。ただし、多くの物件は私有であることもあって用途転用への制限は容易ではない。

II-3「周縁」では都市の周縁に存在する2か所の生活空間の変容をとらえた。

植民都市は、初期の防衛機能の充実に始まり、ついで後背地の資源を生かしつつ交通基盤を整え、これらの集約的拠点としての貿易機能と充実させた。その過程において、教育や文化的機能を充実させてゆく。最終的には余暇空間が整備された。

調査対象地の港湾杭上の同族集落（克蘭ジェティー）と高原避暑地は地理的にも開発対象としても現在の都市社会における周辺に位置する。一方、歴史的には都市建設の先端としても機能した。この周縁性と先端性をあわせもつ生活空間にも、多様な民族の関係性が現れていた。

II-3-⑤ 港湾集落（ペナン）

現地調査は1992年と2012年（当研究課題による調査）に実施している。

港湾に立地する克蘭ジェティーの村民は荷役や補給など港湾を支えてきた。港湾都市の重要な玄関口だった。多民族から構成されるジョージタウンにあって、克蘭ジェティーは、集落ごとに異なる中国系の同姓集団で占められる。固有の婚姻習慣もあって、人口も増減しない。

しかしこの地区は港湾や都市開発による埋め立て計画で幾度も撤去の危機にさらされた。当初、克蘭ジェティーは単に改善を要する開発余地とみなされてきたのだ。

一方でこれが「残存」したのは「一時占有許可（TOL）」が長期にわたり発効し建物の除却や増築を制限したことにある。これにはつねに政治性が作用した。マレー系が優勢な同国の政治情勢下で克蘭ジェティーは政治的にも空間的にも周縁的であった。

しかし都市開発に伴う撤去埋め立て計画や、2002年のある克蘭ジェティーの焼失などの喪失は人々に価値の再認識にむかわせた。また都市生活者から自らの系譜をたどる空間装置としても愛着を持たれ始めた。

その価値の再構築の過程では、各種の市民

団体のはたした貢献は大きい。その活動では、自然保護、環境美化などが提起された。

これが2008年の世界文化遺産の登録により多民族の海港都市ジョージタウンの歴史を構成する一部とみなされる。1990年代前半には、中国系のすまう「周縁」に位置づけられていたが、多民族都市の全体に取り込まれた。この転換は同国の生活空間の価値付けにおいても大きな重要だろう。

海浜に立地する木造建築物を維持することは容易ではなく適切な保全措置は必須だ。

II-3-⑥ 高原避暑地（ペナンなど）

現地調査は1994年と2012年（当研究課題による調査）に実施している。

ここではペナンに建設された高原避暑地のペナンヒルを対象に論じた。避暑地空間は、植民地官僚の熱帯地赴任での療養空間としてマレー半島にも各地で整備された。ほどなく冷涼な気候から余暇空間として受け入れられるようになる。

一方で英領時代は、高原避暑地は在地住民に開かれた空間ではなく、標高によってすみ分けられた。

しかしこの植民地支配を表象する高原避暑地は独立後の社会にも余暇空間として受け入れられた。空間的にも破壊や抹消の対象とならなかった。このことから建設から現在に至るまで変化を経ることなく残存した。

またリースホールドによる不動産所有、水源地として環境保全の対象となったこと、多様な民族集団からみても神聖域としてとらえられ信仰施設が設置されたことも開発を抑制した。

また近年では、克蘭ジェティーと同様、市民による環境保全の先進事例ともなっている。1990年代後半にはディベロッパによる大規模開発計画も発表されるが各種アセスメントや市民の反対運動を受け開発許可がおりなかった。

もっとも、高原避暑地に対する市民の関心の高まりは単に自然環境保全のみにむけられたものではない。

富裕層によって培われた高原避暑地の生活様式は市民の消費意識をも刺激しファッションや住宅のデザインに波及している。住宅団地の住宅の意匠やリゾートホテルの建築様式には同国の高原避暑地で見られるそれと相似している。

II-4「郊外」では郊外住宅団地と衛星都市や新首都建設をとらえた。

計画された都市は、その土地区画と機能の配列、町並みの景観に至るまで、社会全体の意図が作用し決定される。

植民地支配下に形成した都心空間から離れた郊外に、どのように多民族社会を表象する生活空間が作られ、どのように変化を遂げたかをみた。

II-4-⑦ 住宅団地 SS 団地（ジョホール）

現地調査は1993年と2012年（当研究課題による調査）に実施している。

1970年代からマレーシア全土で急速に進んだ住宅団地開発は同国の都市化を支えた。郊外は多様な民族の生活者からなる生活空間となった。郊外住宅団地は国民統合をも表象している。

SS団地のあるジョホールバル郊外は、シンガポールに近接することもあり著しい開発を受けている。

しかしSS団地のみならず多くの住宅団地は早くも劣化しはじめた。ひとたび荒廃した近隣空間は更なる治安や環境の悪化をまねき入居者の定着志向にも影響を及ぼしている。SS団地をはじめ同国のほとんどの住宅団地には身近な近隣空間を維持し管理する住民組織はない。

SS団地でも入居者の民族属性は流動化しており低・中・高の住宅階層を高位の階層に向けて移動している。

一方、周辺の新しい団地との比較で陳腐感が否めない。団地内でも立地や方角上の不評物件やメンテナンスなどで評価の低い住戸は低価格化し、外国人労働者らの宿泊施設に転用され始めた。

1994年時点でもSS団地にも一定の民族が集住する限界が形成されていた。2012年にいたりこの傾向は顕在化していた。この形成の要因は同一民族文化への安心感や、知己を頼った転入、近隣への治安上の不安感が挙げられる。同質な民族集団による近隣空間が形成されることは生活者への安心感につながっている。

団地内の店舗併設住宅では空き家が増加していた。1993年のSS団地では、幹線道路に面していることや、隣接地域に大学や新設の工場などもあって、一定の商業活力があった。しかし一時の治安の悪化や、近隣地域に新規された団地開発と比較した際の見劣り感から活力も低下していた。

住戸空間では、同国の住宅団地の場合、隣戸と壁面を共有する連棟式であることもあって住宅そのものを除却されることはすくない。1994年の調査では画一的な団地住宅をそれぞれの民族文化や嗜好に応じてしつらえを変え、増改築を行うことでその多様性を受け止めているとみていた。

その後、2012年調査ではSS団地の住宅では一様に住宅の増築が進んでいた。ただしこの増改築は住戸の閉鎖性を高めていた。また居室の増設は開口面積を小さくし換気性能を妨げていた。

SS団地には経年による団地空間と社会の成熟をみることができなかった。この理由には、供給された団地での維持管理方策の欠如や、近隣住民組織の未成熟さもその理由といえよう。

現在もジョホールバル都市圏のみならず同国の都市近郊では莫大な規模の住宅団地開発が続く。今後のマレーシアの団地住宅では量的な供給戦略のみならず、住戸や街路や近隣空間の維持管理戦略が重要だ。

多様な民族集団の居住者がともに団地空間の維持に関心を持ち、支えあう社会組織の確立が鍵になるといえる。ひいてはこのことは同国の民族間の融和や国民意識の醸成にも影響すると考えられる。

II-4-⑧ 衛星都市（首都圏）

現地調査は1995年と2013年（当研究課題による調査）に実施している。

独立以降の同国における都市や建築における意匠の変転をとらえた。そのうえで新たな郊外として新行政首都のプトラジャヤをとらえた。

同国の建築デザインの展開過程は、国民意識の醸成をはかり、経済的な発展途上の状況から脱し、著しい経済成長を持続させる原動力としても機能した。国教としてのイスラームに準拠した近代イスラーム様式と、国民文化としてのマレー民族文化を参照した近代マレーバナキュラリズムが広くみられる。

独立期は、これを用いた無数の「独立建築」群が首都クアラルンプールの都市景観をかたちづかった。

この近代イスラーム様式と、近代マレーバナキュラリズムは、建築物単体のみ現れるのではなかった。衛星都市や大学キャンパスなどの大規模な空間にも用いられた。

英国植民地の拠点として開発されたクアラルンプールの近郊に1960年代に計画された「プタリンジャヤ」は、モダニズムによる均質な配置と記号化した街区配列で計画された。次いで1970年代に計画された「シャーアラム」は、マレーバナキュラリズムとしてのマレー農村を翻案した配置を持つ。

一方で、1990年代以降の同国の建築デザインには変転がみられる。同国の建築意匠でも「ハイテク」「エコロジー」を強く意識した建築様式がみられる。

新行政首都のプトラジャヤはこれまでに同国で造営されてきた新都市や郊外と比較してもその規模と面積で圧倒的だ。またその都市景観を決定する建築様式はリバイバリズムや独立のエピソードを翻案した意匠が目立つ。プトラジャヤにはその巨大さを除いてこれまでの衛星都市と一線を画するような新規性が見えてこない。

建設が進むプトラジャヤとクアラルンプールの都市景観にはある種の対比を感じざるを得ない。クアラルンプールの中心地に立地した主要官庁がプトラジャヤに移転するにつれて、クアラルンプールは連邦の政治センターとしてのいちづけから消費都市へとその性格を転換しつつあるかにみえる。

クアラルンプール市内で近年建設される建築物でもとくに公共建築を除いたものからはイスラームやマレーバナキュラリズムが目立たなくなっている。エコやハイテクを翻案した建築物が都市景観を占める。

この2つの「首都」のありかたは、同国において、各地で進む新都市造成にも影響を与えている。

III まとめ：民族混住の動態

民族混住の状況はそれぞれの居住地で社会変動を受け変化しつづけている。これらの混住状況は単なる物的な混在ではなく、異なる文化的背景を有する民族集団が、必要に応じて適切な間合いをもうけつつ、自律的に相互の関係を調整していることを指摘できた。

なお本研究の成果は、集成のうえ刊行の予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

1. 宇高雄志、2013「マレーシアの住宅団地にみる民族構成と生活空間の変容(1993～2012年) ジョホール州のSS団地への再訪問調査を中心に」建築学会計画系論文集、第78巻第694号、pp.2557-2563.
2. Yushi Utaka, Amir Fawzi, 2014, *Dynamism of a Multi-Ethnic Settlement, Georgetown, Malaysia: A Revisiting Field Study and Comparative Analysis, 1995-2011*, International Association for the Study of Traditional Environments, 2014.12.14-17 [論文選集] Selected Paper: Working Paper Series 2014-2015, (260. Navigating Multiple Cultures), IASTE, University of California Berkeley.

〔学会発表〕（計2件）

1. Yushi Utaka, 2016, *Dynamism of Island City's Frontier Settlements: "Clan Jetty" and "Penang Hill", Penang Island, Malaysia*, Island Cities and Urban Archipelagos, 2016.3.7-12, University of Hong Kong.
2. Yushi Utaka, 2015, *Revisiting Field Research in Malaysia: Experiences of Multi-ethnic Settlements 1990s-2010s*, Research on Traditional Built Heritages, Cultural Landscape and Community in Japan and Malaysia", 2015.9.8, Universiti Teknologi Mara, Malaysia

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇高 雄志 (UTAKA, Yushi)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：80294544